

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 1 日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380782

研究課題名(和文)知的障害者における主観的QOL及びライフプランの構築に関する研究

研究課題名(英文)The Study for subjective quality of life and life plan in intellectual disabilities

研究代表者

島田 博祐(Shimada, Hirosuke)

明星大学・教育学部・教授

研究者番号：40280812

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：主観的QOL評価に関しライフプランに関するアンケート調査票を作成し、調査を行った。対象者は知的障害のある成人143名(平均年齢40.8歳)、特別支援学校高等部生徒132名(平均年齢17.3歳)計276名。生活満足度は「とても満足」「少し満足」が併せて75.1%で、成人群が学生群より高かった。10年後に実現したい希望は貯蓄(28.7%)、恋愛結婚(15.7%)、仕事の充実(14.9%)が上位で、成人群で恋愛結婚、学生群で貯蓄の割合が高かった。実現への自信度は貯蓄、仕事の充実に比べ、恋愛結婚が低い傾向にあった。適応状況と支援状況の関係は、SISとVineland 適応行動尺度を用い分析した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate subjective quality of life for intellectual disabilities used by the questionnaire of life carrier plan. Participants were 143 adult persons with mental retardation, average aged 40.8 years, who were living in residential care institutions or in group homes(AdultGroup),and 132 students in special support education schools average aged 17.3 years(StudentGroup).The primary results were as follows: (1) The satisfaction level of life was "very satisfied" and "satisfied a little" were 75.1% in total, and the level of Adult Group was higher than Student Group.(2)High percentage for the hope that participants would like to realize in ten years was "To savemoney, Love & marriage, and Enrichment of work. Confidence in realization tended to be lower in "Love & marriage than "To save money" and " Enrichment of work. The relationship between adaptation and support situation was also analyzed using SIS,and Vineland II adaptive behavior scale.

研究分野：特別支援教育 発達障害学

キーワード：知的障害 生活の質 主観的QOL ライフキャリア 生涯発達支援

1. 研究開始当初の背景

知的障害者に関する生活の質 (QOL) に関する研究は、ノーマリゼーションの潮流と連動して ADL 重視から QOL 重視の支援が必要であるとの認識の高まりとともに、1980 年代頃より進められてきた (Brown, 1999)。QOL 研究の意義に関し、Schalock (1997) は、知的障害のある人々の生活を改善し、現行のリハビリテーション訓練の社会的妥当性を評価するため、この概念をプロセス及び最重要原則として利用しようとする試みがある為とし、その為に必要なこととして、(1) QOL 概念の明確な理解、(2) その効果的な評価方法をあげている。知的障害者の QOL に関する定義や評価方法は様々だが、内容は客観的 QOL (物理環境や処遇面等)

と主観的 QOL (利用者の生活満足度等) の側面に大別され、双方からの評価が不可欠とされる (George & Bearon, 1980; Brown, 2001)。1990 年代後半時点における日本では、QOL の理念に関する論文はあったものの、知的障害の分野における実証的な評価研究はほとんどなかったことから、島田は中高齢知的障害者を主対象に、平成 9 年 11 年度に「グループホームに住む高齢知的障害者の生活実態及び支援に関する研究 文部省科学研究費基盤研究 C」、平成 13 - 14 年度「高齢知的障害者 QOL (生活の質) に関する実証的研究 文部省科学研究費基盤研究 C」の助成を受け、入所施設とグループホームにそれぞれ居住する知的障害者の処遇・生活実態に関する居住環境比較、体力的、精神的面における機能比較等の研究を QOL 向上の観点から実施し、研究論文としても発表 (島田・渡辺他, 2000; 2002; 2002) してきた。その過程で支援者が主に評定する客観的 QOL の側面に関しては、一定の結論を導き出すことができたが、主観的 QOL に関しては、13-14 年度の科研費研究の一部や平成 12 年度ジェロントロジー研究報告書 (日本興亜福祉財団) の

研究等で 試案までを示すに留った。その後は「芸術による知的障害児者学習支援の研究」「オープンカレッジ東京」の試みに関する共同研究等、本研究と関連した試みは一部実施してきたものの、現職への異動と教育学部開設等に伴う業務などで、長く中断を余儀なくされた。しかし、その後も主観的 QOL に関する実証研究は事例研究を除いてはほとんど見られていない。従って、当事者自身が自らの生活と支援ニーズを結び付けてイメージしやすい主観的 QOL 評価尺度を作成し標準化することは意義があると考えられる。

2. 研究の目的

(1) AAIDD (アメリカ知的・発達障害協会) の「知的障害のある人の支援尺度 (SIS)」を参考に、中高齢知的障害者の生活満足度等を中心とした主観的 (Subjective) QOL 評価尺度の開発、作成、それによる調査を行う。(2) 前回の助成研究時に実態把握をした一部対象者に関し、10 年余を経て縦断調査を実施し、加齢や生活変化等による変化を把握する。(3) 特別支援学校高等部を対象に、キャリアプランを含む人生設計に関する調査を実施する。(4) 上記の諸目的を包括し、知的障害者における QOL の重要度、機会度、努力度、達成度、将来度及全体満足度を把握することで、今後の福祉・教育施策に資することを最終目的とする。

3. 研究の方法

主観的 QOL 評価尺度としての「ライフプランに関するアンケート調査」実施、併せて「知的障害のある人の支援尺度 (SIS)」、「Vineland」等の支援・適応尺度を用いた調査を実施。調査項目は「あなたのことを教えてください (属性)」、「あなたの今の生活について教えてください (現在の生活実態)」、「10 年後のあなたを想定して下さい (10 年後へのライフプラン)」の 3 パートに分かれており、それぞれに以下の下位質問項目を含んだ。フェイスシート、今の

生活について教えてください（生活の楽しみ・困っていること・相談先・生活満足度・将来への不安・将来決定に自分の意見を聞いてほしいか等）、.10年後のあなた（10年後にかなえたい希望・実現可能性・そう思う理由・実現のために必要と思うことなど）。諸項目に関し、全体及び成人群 VS 学生群の比較分析を行った。

4. 研究成果

文献研究

QOL は、生きがいや幸福感等の面で豊かで充実した生活を保証するための概念であり、産業革命時に炭鉱労働者の生活水準を表す用語として登場し、学術的には1940年代末、悪性腫瘍患者における治療環境の改善研究として始まり、医療分野における健康関連QOLとして発展した。当初は治療効果を見るための疾病に即した効果測定（疾患特異的QOL尺度）の研究が主であったが、次第に生活全般を捉え、いくつかの領域での機能等を包括的に評価する包括的QOL尺度として捉えられるようになり、1960年代以降、ノーマリゼーションの理念の高まりと共に、包括的QOLは福祉、続いて教育分野においても考慮されるようになった。WHOではQOLを「個人が生活する文化や価値観の中で、目標や期待、基準及び関心に関わる自分自身の人生の状況についての認識」と定義している。QOLの探究は70-80年代の様々な評価研究へとつながった。医療・看護領域に係る健康関連QOLに関しては、1985年にFood and Drug Administrationで薬剤効果とQOLの関係が討議され、その流れは1994年の第1回国際QOL会議へと発展し、日本でも2000年に日本QOL学会が設立されている。健康関連QOL尺度の例として、統合失調症の欠損症状とそれに基づく対人関係や仕事等の機能低下を半構造化面接で評価したQLSやホスピス患者の生活満足度に関する質問票であるLSI等がある。

一方、福祉・教育領域におけるQOL研究は、

包括的QOLの観点で行われてきた。LawtonはQOLを心理的満足度、行動的権限、物理的環境、認識された生活の質等の4つのカテゴリーに分類し、Flanaganは物理的満足、人間関係、社会活動、個人的達成、余暇の5つの尺度による検証を行っている。これらは伝統的な健康関連QOLの概念を身体、心理、社会的領域に拡張したものである。包括的QOLの代表的な評価尺度として、WHOQOL26がある。

同尺度は身体的・心理的・社会的関係・環境の4領域で構成され、26の質問に対する5段階評定で評価を行う。身体的領域には「日常生活動作、医薬品と医療への依存、活力と疲労、移動能力、痛みと不快、睡眠と休養、仕事の能力」、心理的領域には「ボディイメージ、否定的・肯定的感情、自己評価、精神性、宗教・信念、思考・学習・記憶・集中力」、社会的関係には「人間関係、社会的支え、性的活動」、環境領域には「金銭関係、自由・安全と治安、健康と社会的ケア、利用のしやすさと質、居住環境、新しい情報技術の獲得の機会、余暇活動への参加と機会、生活圏の環境、交通手段」がそれぞれ下位項目として含まれる。またWHOQOLを参考に、子供を対象としたQOL評価を行うKINDL[®]尺度も作られている。

障害児者関連のQOL研究は主に、施設からの地域移行に係る生活・適応状況の実態評価と関連して進められた（Pracher, et al, 1978; 島田ら, 2002等）。QOLの評価内容は様々だが、客観的QOL（物理的環境や処遇等）と主観的QOL（個人の生活満足度等）に大別できる。特に主観的QOL評価はケアマネジメントにおけるPCP（本人主体の計画）の点からも重要視される。Schalockは、知的障害者におけるQOLの包括的評価モデルを提起した。QOLを身体的幸福・感情的幸福・対人関係・社会的包括・個人の発達・物質的幸福・自己決定・権利といった8つの中核領域に分類し、各々に関し以下に示す3

つの測定を行い評価指標とした。(1) 個人的評価：幸福、主観的快適さ、満足感等、個人の価値評価を測定するのに適した方法(例：個人面接や調査)(2) 機能評価：適応行動や役割状況に関連する個人のパフォーマンスを測定するのに適す方法(例：各種知能検査、適応行動尺度等)(3) 社会的指標：社会水準の条件や結果を測定するのに適した方法、一般には健康、社会福祉、友情、生活水準、教育、公共の安全、住居、近隣、余暇など環境に基づいた外部条件(例：知的障害のある人の支援尺度 = SIS 等)。(1) は主観的 QOL、(2) は個人的能力、(3) は客観的 QOL にほぼ相当し、各評価指標は相互に影響し合う。例えば劣悪な環境の施設居住者の場合、(3) 社会的指標スコアが低くなると共に(1) 個人的評価も低くなり、それらに基づくストレスにより心身面の機能も低下する為、(2) 機能評価スコアも低下する。QOL を多面的概念構成体と捉え、個人及び環境・状況の因子による影響を受けることを想定したモデルであり、ICF (国際生活機能分類) の考え方とも共通する。

実践研究「主観的 QOL 調査としてのライフプランに関するアンケート調査」

【方法】

1. 対象者

成人群：知的障害のある成人 143 名(男 85・女 58) 平均年齢 40.8 歳(18~84 歳)。学生群：特別支援学校高等部生徒 132 名(男 93・女 39) 平均年齢 17.3 歳(15~18 歳)。計 276 名

2. 手続き

成人群に関しては郵送調査(生涯学習講座受講生、返信封筒を同封した事前アンケートを郵送~回収率 73.3%)と訪問面接調査(主に入所施設、グループホーム)を併用した。学生群に関しては協力校に依頼し、授業中に回答してもらい回収した。調査項目は「.あなたのことを教えて下さい(属性)、.あなたの今の生活について教えて下さい(現在の生活実態)、.10 年後のあなたを想定して下さい(10 年後へのライフプラン)」の 3 パートに分かれており、それぞれに以下の下位質問項目を含んだ。

.フェイスシート、.今の生活について教えてください(生活の楽しみ・困っていること・相談先・生活満足度・将来への不安・将来決定

に自分の意見を聞いてほしいか等)、.10 年後のあなた(10 年後にかなえたい希望・実現可能性・そう思う理由・実現のために必要と思うことなど)。諸項目に関し、全体及び成人群 VS 学生群の比較分析を行った。

結果】

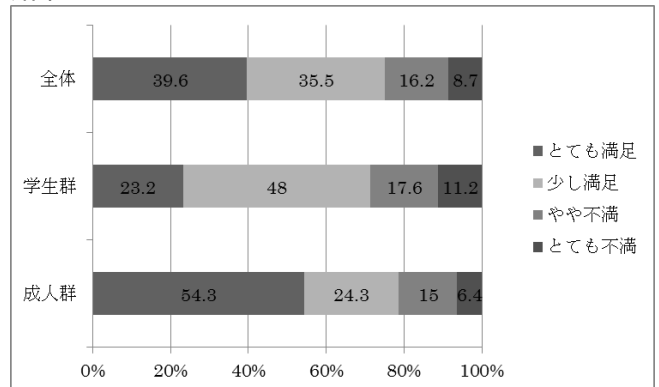


図 1. 現在の生活満足度について (%)

n=265

生活満足度に関し、全体では「とても満足」「少し満足」を併せ 75.1%が高い傾向にあり、群間比較では²検定で 1%水準の有意差(² = 8.28, df=3)が認められ、成人群における高満足度の割合が高かった(図 1)。満足の理由(多重回答)は、成人群では「余暇趣味」が 69 名(群内割合 65.1%)、「家・住居」が 63 名(同 59.4%)、「買い物」47 名(同 44.3%)、「友人」44 名(同 41.5%)、「活動参加」が 33 名(同 31.1%)。学生群では「余暇趣味」が 67 名(群内割合 75.3%)、「友人」57 名(同 64%)、「家・住居」36 名(同 40.4%)、「買い物」35 名(同 39.3%)と同傾向であった。不満理由は両群とも「その他」の割合が最も多く、主に個人的な事由であった。

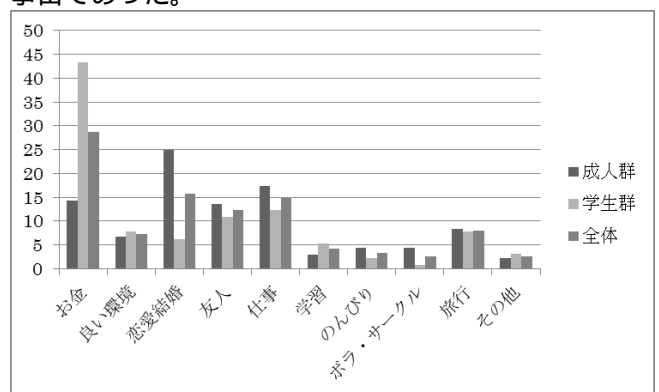


図 2. 10 年後までにかなえたい希望 第 1 位 (%) n=261

10 年後までに実現したい希望の第 1 位割合を図 2 に示した。全体では「お金」75 名(28.7%)、「恋愛結婚」41 名(15.7%)、「仕事」39 名(14.9%)が上位だった。群間比較では成人群で「恋愛結婚」33 名(25%)、学生群で「お金」56 名(43.4%)の割合が高く 1%水準の有意差(² = 40.85, df=9)が認められた。全体上位 3

項目の実現への自信度に関し示すと、「お金」が「絶対できる」「たぶんできる」を併せ 50 名 (71.4%)、「仕事」が同 25 名 (65.8%) であるのに対し、「恋愛結婚」はわずか 19 名 (47.5%) に留まっていた。

【考察】

生活満足度が比較的高い要因として、日中活動及び余暇の充実が考えられる。学生群の 99.2% が学校、成人群の 68.1% が一般企業或いは作業所に行っており、生活の楽しみにつながる余暇も豊富である。入所施設においても、島田他 (2002) が処遇に関する施設間の比較調査を実施した頃に比べ、外出機会の保障や余暇ボランティアの導入等の工夫がなされている。

10 年後の希望に関しては、学生群の場合、まずはしっかり働き収入を得るというワークキャリアの実現に力点が置かれたと思われ、高等部におけるキャリア教育の影響が窺える。

一方、成人群の場合、個人差はあるがそれなりに生活が安定した中で、パートナーを求める気持ちが高まったのではなからうか。しかし「恋愛結婚」の実現への自信度は低く、特に成人群でその傾向が強い(「少し困難」「できない」を併せ 53.2%)。

理由として「(異性と)接する機会がない」「ちょっと不安」「年齢的に無理」「(親族に)歓迎されない」等の回答が挙げられており、出会いの機会がないことや、現在においても、周囲から必ずしも肯定的に捉えられない場合があることを、対象者が意識した可能性がある。「恋愛結婚」は本来プライベートな事項で、支援する対象とすべきか否かの議論はあるが、当事者の QOL 向上の観点からは、やはりライフキャリアの視点に立った、何らかの外的支援が望まれるのではなからうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)
投稿審査予定あり

〔学会発表〕(計 3 件)
島田 博祐 高橋 亮 (2017)
知的障害児者のライフプランに係る主観的 QOL に関する調査 現在の生活満足度と 10 年後に向けての希望—
日本発達障害学会第 52 回研究大会 (群馬・国立高崎コロニーのぞみの園、2017 (発表予定))

島田 博祐、綿引 清勝、清水 浩 (2015)
知的障害児者のライフキャリアプラン構築に関する研究 (2) 成人知的障害者と特別支援学校高等部生徒の比較検討

日本特殊教育学会第 53 回大会 (宮城 東北大学)、2015

島田 博祐、大沼 健司、清水 浩 (2013)
知的障害者のライフプランに関する調査 (1) 生涯教育プログラム受講者を対象とした 10 年後の自身を想定してのアンケート調査から—
日本発達障害支援システム学会第 12 回研究セミナー (東京 学芸大)、2013

〔図書〕(計 1 件)
島田 博祐
日本 LD 学会編 発達障害事典
生活の質 (474-475) 成人生活におけるマナーとルール (518-519) 丸善出版、2016

〔その他〕
ホームページ等
島田 博祐
知的障害児者の QOL (生活の質) と生涯学習に関する研究について
都立志村学園セミナー (都立志村学園)、2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者
島田 博祐 (Shimada Hirosuke)
(明星大学・教育学部・教授)
研究者番号：40280812

(2) 研究分担者
渡辺 勤持 (Watanabe Kanji)
(美作大学・社会福祉学部・客員研究員)
研究者番号：00090423

(3) 連携研究者
()
研究者番号：

(4) 研究協力者
志賀 利一 (Shiga Toshikazu)
(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 事業企画局研究部 部長)
研究者番号：20520878

高橋 亮 (Takahashi Ryo)
(仙台大学体育学部健康福祉学科)
研究者番号：80348135

清水 浩 (Shimizu Hiroshi)
研究者番号：50739365
(山形県立米沢短期大学社会情報学科)